

4

地域社会論演習：盛岡秋祭り「め組」山車運行への参与観察調査

岩手県立大学盛岡短期大学部 教授 三須田善暢

該当する
原則

原則 9：持続可能性を推進する

1. 活動の背景

「地域社会論演習」（盛岡短大部国際文化学科2年時授業）の目的は、地域で何らかの企画をたてて実施し、それを学びに役立てるといふ、いわゆるサービスマーケティングに近いものです。その趣旨にもとづき、今回は三須田が長年関りをもつ盛岡市鉦屋町の「め組」（盛岡市消防団第二分団）がおこなう、盛岡秋祭り（盛岡八幡宮例大祭）への山車運行（2023年9月13日～16日）に参加しました。「め組」による山車運行は7年ぶりでありまして、そこでの参与観察を踏まえて秋祭りと消防団、地域社会との関係を考え、課題の解明をおこなおうと試みました。

2. 活動の経過

(1) 事前学習と事前練習

まず2年前期の授業「地域社会論」で日本の地域社会についての概要を勉強し、同期「地域社会研究法」で質的社会調査の基礎を学んだうえで、夏季休暇時に祭りについての自主学習をおこないました。参加者は国際文化学科2年生6名（男性3名、女性3名）で、テキストは、過去の演習の報告書（岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科編2016）と三須田が書いた報告論文（三須田2017）、および社会学者松平誠（1980）の新書でした。松平のものは地域の祭りの概要を知る上でも、また報告書執筆にあたっても参考になるものです。

これらの座学をおこなう一方、我々は2023年6月中旬から、大慈寺地区コミュニティセンター2階でおこなわれる「音頭あげ」の練習会に参加しました。「音頭あげ」とは木遣りから発祥したものといわれ、寄付をいただいた家や企業に対して感謝の気持ちを込めて「七・七・七・五」の文句を独特の節回し（「め組」では「二上がり」といわれています）で謳いあげるものです。この練習は、お盆までは数回、お盆以降祭りの当日までは毎日のように夕方2時間弱ほどおこなわれました。参加者は学生以外は5～6人でしたが、日によって増減がありました。参加者は老若男女幅広く、小学生もたまに数名参

加していました。参加者のほとんどは他の組での祭りの参加経験があり、はじめて参加するのは我々県立大の学生のみでした。

なお、音頭あげではなく小太鼓での参加を希望する女子学生も1名おり、彼女は大慈寺地区コミュニティセンター周辺でおこなわれる小太鼓の練習に参加しました。小太鼓は主に小学生が参加するものであり、彼女は祭りの練習期間から当日に至るまで小学生たちと親しく接していました。

本来であれば山車と人形の制作自体にも関与したかったのですが、今回は前回の体制とややことなっていたことや、連絡の行き違い等から、学生たちが山車と人形の制作に関わることはありませんでした。

このようにして祭り当日まで参与観察をおこなっていましたが、ちょうど新型コロナウイルスに罹患する関係者もでたため、学生のなかには十分に参与観察できなかった者もいました。結局、祭り当日には学生2名が体調不良で欠席せざるをえませんでした。

(2) 祭り当日

2023年度は、コロナでの自粛があけたため、盛岡市内内各地から10台もの山車が参加することになりました。そのため、前回2015年の「め組」参加者は300人以上でしたが、今回は200人ほどと少なくなりました。うち、児童生徒は30～50人くらいの参加者でした。

山車運行時の前回からの変容について、参与観察のなかで見出された興味深い出来事をごく一部を述べます（※）。

〔女性参加の許容と反発〕

女性が「大太鼓」をたたくことをはじめて許可したのは「め組」でした。それは昭和40年代のことです。それ以前は大太鼓のみならず「小太鼓」も男子のみがたたけるものでした。その背景には、人手がたりなくなってきたことと、女性の側にたたきたいという希望者がでてきたこと、さらには“女性が参加すれば男性の参加者も



音頭あげをする学生

増える”といった狙いもありました。そうした状況を踏まえて分団長が許可をし、女性の参加が可能となったのです。時代の状況変化を背景にしつつも、分団長の裁量が大きいかうかがえます。

現在でも「手木（拍子木）打ち」は男性のみとされています。ですが、今回の運行の4日目（9月16日）午後の「鉦屋町パレード」（鉦屋町のメインストリートを練り歩くこと）においては、大太鼓をたたいていた若い女性が手木を打ちました。「楽しみたいから」という理由により、このパレードでは「なんでもOK」（「め組」の中心人物のI氏）だったからです（あまり音頭あげが上手ではない我々がこの時間帯に多くの音頭をあげられたのは、こうした事情によります）。ところが、音頭あげに参加した一部の女性から、手木の采配や作法の下手際について手木を打った女性に対して強い批判が浴びせられ、手木を打ったその女性が運行中に号泣するという事件にもなりました。批判した女性の「私も若い頃に[拍子木を]打ちたかったのに、打つもんでねえと親に言われてきたから我慢してきた」といった発言からうかがえるように、若い世代が既存の型を崩すことへの不満、および、「なんでもOK」という「め組」の方針が参加者全員に伝わっていなかったことも影響していると思われます。この点が今後どう変化していくかは、ジェンダーの問題ともかわって注目していきたいところです。

〔笠越と節約〕

今回は、祭りの最終日9月16日に、笠越（慰労会）をおこなうことになりました。これまでは日を改めてホテルなどで大々的におこなっていた（2015年は盛岡グランドホテル）のですが、今回はもりおか町家物語館の浜藤ホールで、オードブルの出前による簡易の笠越となりました。そうなったのには、例年よりも企業の寄付金が集まらないという事情が大きいです。I氏いわく、企業の寄付は2015年の半分程度でした。山車の運行台数が10台と多かったことが関与していると思われます。加えて、山車運行時に寄付を求めることについて市民からの苦情があり、近年は寄付をもとめて家々を歩くことを自粛するようになったという事情もあります。こうした事情により今回は節約を旨とし、参加料も前回よりも高めに徴収することになりました（前は6,000円）。だから、運行時の昼食にだす飲み物も「ビールではなく発泡酒を用意し、弁当も質が下がっている」（I氏）。実際、参加者の中からはこの点についての不満も聞かれました。こうした節約状況については響く側でも同様のようで、山車が休息をとる魚屋では例年お刺身をふるまっていたのですが、今年はそれがなくて参加者は残念がっていたというエピソードがあります。

このような会計上の大変な点についてI氏は、山車制作

と同様、次世代への継承の問題を指摘します。たとえば、運行期間中にどこをどのように歩けば寄付がいただけるのかということや、山車が来るのを楽しみに待っている箇所（老人ホームなど）の場所などをどのように後輩に伝えていくかといったことも、氏は検討事項と考えています。

このように、今回の山車運行は前回と比較すると多くの面において大変なところが多かったといえます。しかしI氏は次のようにも述べています。「人が動けばお金も動く。地域にもプラス。それ以上に「め組」から山車をだした方が楽しいよね。」「お祭りは神社への奉納ではあるが、そこには社会的なものが動く。やっぱり楽しいんだよな。みんなで集まってごちゃごちゃやるのが——そのなかで社会を形成するということがベースにある。」それゆえ、I氏はあまりに厳格な方針をとることはどうかと考えています。

(3) 追加調査および音頭研究会への参加と報告会の開催

祭りの最中に参加者から盛岡山車音頭研究会の存在を教えられて、後日にそちらにも参加することにしました。この会は音頭あげを聞き取りやすく伝えることを目的として伊藤吉之助氏が設立した団体です。現在は月2回、杜陵老人福祉センターで練習をおこなっており、ベテランは勿論、比較的若い人も含めて10人程度が参加しています。この会では「正調」のもとに音頭を統一しようとはせず、それぞれの分団の歌い方を尊重しています。祭り当日に欠席せざるをえなかった学生は、後日この団体への参与観察と調査をおこなっています。

祭りが終わって以後も関係者への追加調査をおこない、2024年3月15日の夕方に大慈寺地区コミュニティセンター2階で報告会をおこないました。このときは分団長はじめ30名ほどの参加者がありました。“学生たちの報告は地元の人たちにとっては目新しいものではないかもしれない”と三須田は一抹の不安を感じていたのですが、「若者がどう考えているのか知れて、継承へ何が必要か話す場になった」（分団長O氏）という好評をいただき、「これを他の分団でも話したらどうか」としてくれる方もいて、嬉しい結果となりました。

3. 今後の活動

学生たちの短大卒業後も、如何にして継続的な活動を保っていきけるかが課題です。そこには、後続世代の学生にどのように体験を伝えていけるかということと、卒業後も地域と関われる仕組みづくりが重要でしょう。鉦屋町には「もりおかワカものプロジェクト」という団体があります。ここの連携如何で、学生の教育面および地域の活性化面においてより積極的な成果をもたらさるのではないかと考えています。

※ (2) の箇所の記述は報告書（岩手県立大学盛岡短期大学部三須田善暢研究室編、2024、『2023年度「地域社会論演習」報告書』）からの抜粋です。文献 岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科編、2016、『2015年度「地域文化理解演習」報告書』。松平誠、1980、『祭の社会学』講談社。三須田善暢、2017、『盛岡秋祭り「め組」における参加者の相互作用関係』『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』19: 75-80。